

大河童

大芥川龍之介

かほもん



くまもん人気に

便乗して

ゴリ出せなにか

男は、重いリュックを背負い、上高地の温泉宿を出て朝霧の下りた梓川の谷を登っていた。

霧はどんどん深くなる。登のをやめようかとも思ったが、引き返すにしても霧が濃すぎる。いつそ登ってしまおうと決めた。

しばらく熊笹の中をわけいって歩いたが、そのうちに腹が減ってきたので、梓川の水辺に出て食事をとることにした。

水辺の岩に腰掛けて、パンを囓りながら腕時計を見ると、もう一時二十分すぎだった。

そのときだ、丸い腕時計のガラスに顔が映り込んだ。



驚いて振り返ると、そこには絵にあるとおりの河童が立っていた。

片手に白樺の枝を抱え、もう片手は目の上にかざしてこちらを珍しそうに見ている。

しかし、身長は50メートル。

「大河童が出たー！」

男は叫んでその場を逃げようとした。

しかし、大河童はズシンズシンと足音を響かせて追いかけてくる。

「がおー！」と大河童が吠える。その声が霧の中こだまする。



「たすけてくれー!」

その声を聞いたのか、谷を一台の戦車が登ってきた。地球防衛隊だ!

地球防衛隊の戦車は大河童に大砲の照準を合わせると、いきなり砲弾を発射した。

バーン!

弾は大河童の胸に命中して炸裂した。

大河童はギャツと後ずさった。

弾が当たった周囲は黒く焼け焦げ、

煙が立ち上る。

しかし大河童は、片手の平を頭の皿に溜まった水に浸し、その手で傷口を撫でると、あら不思議、きれいに治ってしまった。

戦車は続けて数発大砲を



発射したが、どれも大河童の頭の水できれいに治ってしまう。恐るべき生命力だ。

地球防衛隊の戦車の中で、隊長は考えた。どんなに大砲を撃ち込んでも大河童はすぐに傷を治してしまふ。これではまったく歯が立たない。

「どうしたらいいんだ?」

そうしている間にも、大河童は地響きを轟かせてどんどん迫ってくる。

「隊長、大河童はかなり



かっぱ堂
本舗
命の水

接近しています。このままでは踏みつぶされます！」

「カッパ、ラツパ、カッパラツタ……」

隊長はなにやら呟きながら考え込んでいる。

「カッパツパー、ルンパツパー……」

固唾をのんで隊長の指示を待つ隊員たち。大河童はもう間近に迫り、戦車を見下ろしている。

「そうか！」

隊長の目が光った。

「大河童のあごの下を狙って撃つんだ！」

「はい、隊長！」

清酒かっぱ

古いモダンな
ノレんの味……



戦車は大砲の砲身を目一杯にあげて撃った。
バーン！

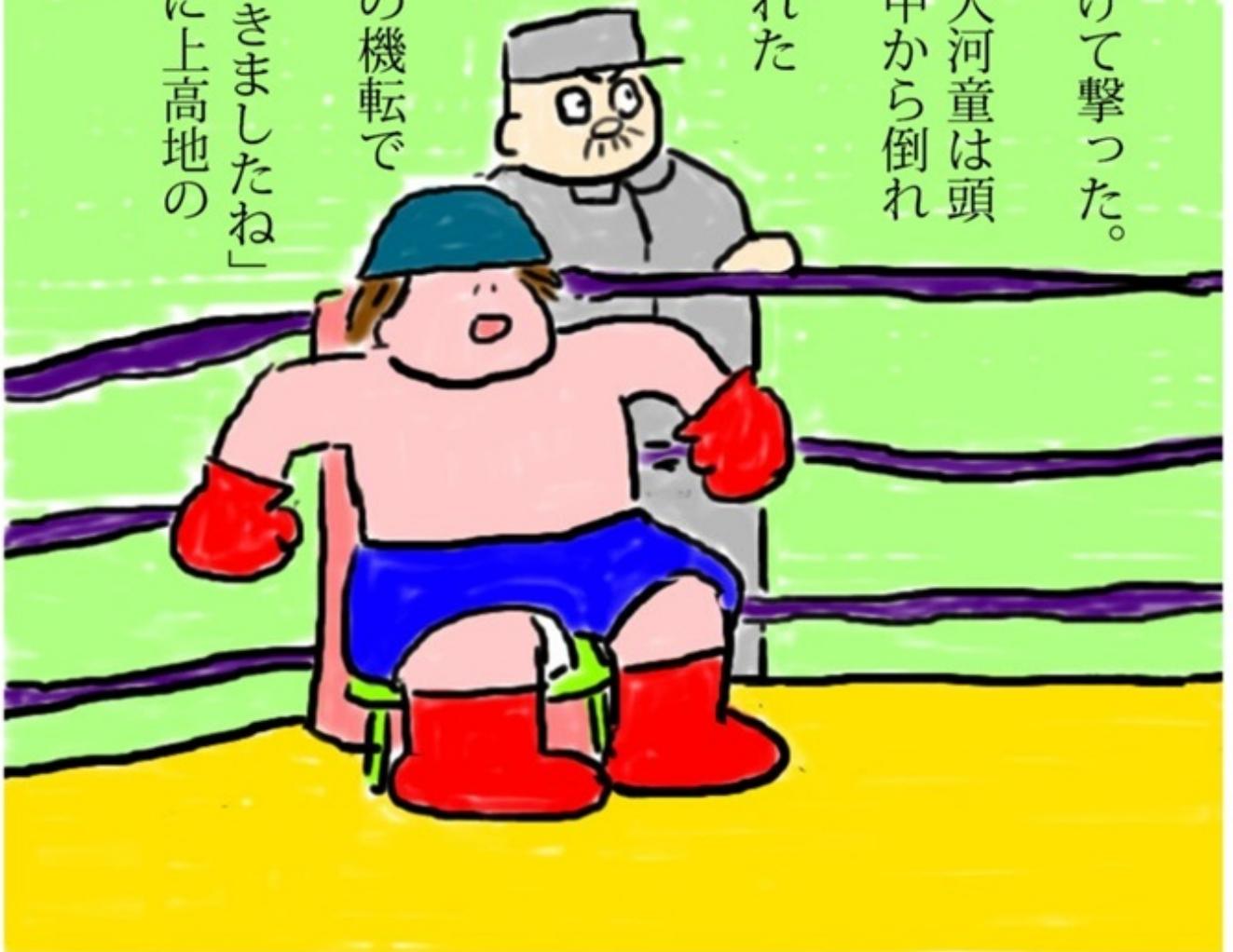
砲弾は大河童の下あごに命中。大河童は頭
を大きくのけぞらせ、そのまま背中から倒れ
込んだ。

その衝撃で頭の皿から水が失われた
大河童は力を出すことができず、
起き上がろうとしたときに
体全体が水しぶきとなって消えた。

「隊長、お見事です！」

今日も危機一髪のところを隊長の機転で
勝つことができた。

「しかし隊長、よくこの手を思いつきましたね」
隊員た尋ねると、隊長は満足そうに上高地の
山々を眺めて答えた。



「なーに、相手がカッパだからな、アツカーパットで決めてやろうと考えたのさ」

隊長は、シャドーボクシングのポーズを取って、隊員の顎のしたに拳を軽くあてた。

アツカーパット……。

もしかして、アツパーカットの間違いではないのか、と隊員は気がついた。いや、もしかしたら隊長は冗談を言っているのか。でも本当に間違えているのだとしたら、笑っていけない。



冗談なのか本気なのか、
判別のつかない隊長の態度
に隊員は戸惑い気まずい空気
が流れた。

そんな隊員の気兼ねをよ
そに、隊長はハッチから身
を乗り出し、すっかり霧
の晴れた山の空気を吸い
込むと、屈託なく言った。

「さあ、帰るぞー！」

おしまい



大河童

<http://p.booklog.jp/book/73962>

著者：大芥川龍之介

絵：中川善史

発行：文豪堂書店

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kanaitetsuo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/73962>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/73962>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ